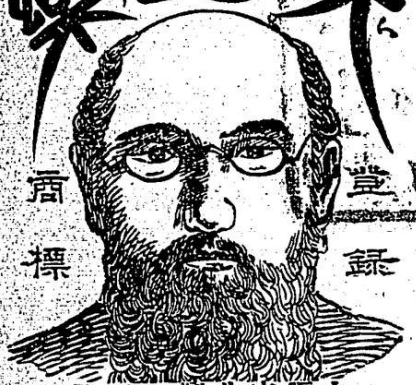
大學目藥



『世の進むに従ひ目薬にも
こんな立派な物が出來ました

商標

登録

大阪市北濱一丁目

田口參天堂

ヘプリン丸元祖本家

此薬は帝國醫科大學
醫院の處方に基さし
貴重の製劑也有古し
賣藥の類に非ず

定價十錢・点眼瓶入卅錢・大瓶五十錢

▲効能　はやり目・トラホーム・星目・のぼせ目・かすみ目・血目・突目・疲目・其外眼病一切に驚くべき確効あり

▲各地藥店にて取次す

大阪毎日新聞記者 相島勘次郎君 佐藤政次郎君 共著（八月中旬出版）

改修第十一版

渡米のすゝめ

洋裝新形 美本全壹冊 實價金廿五錢 郵送費四錢

附錄◉北米全圖▲太平洋沿岸地圖▲桑港地圖▲シヤトル地圖

本書前版の購讀者にして未だ渡航を果さゞるもの若しくは有爲の青年にして海外雄飛の念あるもの奮て本書を再讀せよ、本書十一版に及んで改造的の大修正を行ひ志望者の尤も難しとする旅行免狀下附の手續きより上陸就職に至る迄の順序詳密盡せて剩す處なし、無盡の寶庫を開拓して赤手外資の大輸入を企て國を潤はし自己を益する者一に諸子が双肩にあり猛省一番、本書を俟て是か道しるべとなせ

發行所 大阪市東區備後町四丁目（電話東千〇四十二番） 岡島書店

水谷不倒閲

東輝支編

古今雅俗 東海鐵道名所記

東海鐵道名所記の序

去る三月の事であつた。一日東輝文君は『東海鐵道名所記』といふ書稿を携へ、わが鞆上通の陋居を訪れ、之に對するわが卑見を求められた。依て其草稿を見たるに頗る有趣味の書で、一言掩へば官線東海鐵道の名所案内記であるが、著者の結撰は遖に普通有觸れた名所案内とは趣を異にして、地理、里程、名所舊蹟を說くの傍ら、古人が其ところ〴〵に吟詠したる詩歌、俳句、狂詠などを附加へ、地理を知ると同時に風雅の道に心を慰むるの便あらしめ、殊に東海鐵道各驛（停車場）と舊東海道五十三次の驛次とを對照して、一見昔と今との旅車一斑を知らしめたのは、誠に面白き趣向といはねばならぬ。近來瀛車旅行の流行するにつれ、記行文、案内記等の世に出るものは澤山あるが、或は簡略に失したり、或は趣味に乏しかつたりして、

旅人の手引となり、かねては旅情を樂ましむるやうな好書は實に少ない。然るに東君の此『東海鐵道名所記』は、是等名所案内記の中の缺を補ひて異彩を發し、趣向の面白いばかりでなく、記事が凡て詳密で且親切で、事實を知る上に詩趣を味ふといふ便利があつて、實に旅人の好伴侶たるに耻ない書だと思はれる。

加之書中には神社佛閣さては風景の著名なるもの丶寫眞版と、又風景畫に妙を得たる故人廣重の畫ける東海道五十三次の錦繪より優れたるもの數葉を撰出して之を木版にしたるものと各數十葉の畫を挿入したるは、千里を走る瀛車の中に臥で往來する昔の東海道を偲ばしめ、今昔の感、興味うた丶盡ぬものがある。

修辭其他に就てはわれも亦一二卑見を述べたる因により、近日此書の活版に附せらるゝと聞き思ふところを記し序に代ふ云爾

癸卯七月　　水谷不倒識

はしがき

回顧すれば三四十年前、舊幕時代には伊勢參宮といひ金毘羅參りといひ苟くも旅行するに際りては親十朋友と永訣の離杯をなして袂を分ち海路には不完全なる和船、陸路には僅に人を運ぶに駕籠馬脊あるのみにて日に十數里を行くにも止まりしもの今や一瞬千里の汽車ありて安座の儘千山萬水の間に馳走して神戸東京の間も一晝夜を費さずして達し得るの世となりぬ之を昔しの不便に較ふれば素より同日の論にあらざるも壞を得て聞を望むは人情の常、驩ては汽車中の徒然を感じ一日の態屈を如何にして散ずべきか上戸は正宗の瓶詰さては麥酒に鬱を遣るもあるべし下戸は菓子果物濫りに甘きを貪りて口腹を飽かしめ僅に汽車中の徒然を慰めんとするも身體の益にならざるのみか時に眠を催ふして掏兒に隙を窺はるゝことあり唯讀書のみ不知不識時間を消するの媒介なれども是さへ撰擇を誤る時は旅の好

伴侶たる能はずして却て心神を疲勞せしむ余や日頃旅行を好むの癖ありて常に此事を感じ汽車中にて讀むべき好書を撰まんとするの意志切なり職務の餘暇を以て東海鐵道線路の各驛及び舊街道五十三次を基となし之に附隨する沿道の名勝舊跡さては之に關する詩、歌、狂歌、俳句、戯文、俗謠等の見るべく吟賞すべきものを集めて一編となし號けて東海鐵道名所記といふ素より淺識不文の著にして其目的を達するは難しといへども中に網羅したる詩歌吟詠には古人の名什決して少なからず殊に各驛近傍の地理里程等を説くに至りては虚文を去りて簡明平易を貴び事實を逃ぶるに努めたるは編者の聊か苦心したる所にして汽車中徒然の旅情を慰むるには趣味あり且つ旅行者に便利實益を與ふる書たることは編者の信ずるところなり聊か記して其はしがきとはなしぬ

明治三十六年七月　　備中妹尾町の寓居に於て　　東輝文識

凡例

一本書は東海鐵道線路を旅行せんとするに當り汽車中の徒然を慰め旁ら地理の指導に供せん爲め東海鐵道各驛を基とし沿道の名所舊蹟神社佛閣名山大川をはじめ古今名家の吟味せし詩歌俳文より狂歌狂詩狂俳俗謠等に至るまで雅となく俗となく其趣味に富めるものを蒐めしも成るべく簡明を旨としたるを以て脱漏のもの亦少なからず

一本書に記載する社寺及び名蹟等は勉めて現況を寫したりと雖も事世の變遷により往々齟齬することなきを期せずしかも編者一々踏査したるにも非ざれば錯誤の點なきを保し難し大方の君子幸に高教を吝む勿れ

一本書を編するに當り引用參考に供したる書籍多し然れども著者素より一介の書生藏書に乏しければ諸先輩より供覽したる書少からず殊に本山彦一君は其書庫を開きて多くの書籍を貸與せられたり

是等恩人に對しては深く謝する所なり

一本書は水谷不倒君の周到緻密なる校閲を得たり本書の成るは一に君の賜なり是れ亦深く謝する所なり

明治三十六年七月

編者識

古今雅俗 東海鐵道名所記目錄

○旅行する人の心得……一
○鐵道官設 東海道線の位置……九
○新橋驛……一〇
東京市……一二
日本橋……一五
○品川驛……一七
品川町……仝
東海寺……一九
海晏寺……二〇
御殿山……仝
泉岳寺……二一
○大森驛……二二
八景園……仝
蒲田の梅林……仝
本門寺……二三
六郷川……二四
○川崎驛……二五
川崎町……仝
川崎大師堂……仝
小向梅林……二七
○鶴見驛……二七
○神奈川驛……二八
神奈川町……仝
○横濱驛……三〇
横濱市……仝
杉田梅林……三一
○平沼驛……三一
○程ヶ谷驛……三一
程ヶ谷町……仝
金澤八景……三二

金澤文庫の遺蹟……三四
○戸塚驛……三四
戸塚町……三五
○大船驛……三六
鎌　倉……仝
鶴岡八幡宮……三八
鎌倉宮……四〇
鎌倉五山……仝
○藤澤驛……四一
藤澤町……仝
遊行寺……四二
龍口寺……四三
鵠ヶ沼海水浴……四四
江の島……仝
○茅ヶ崎驛……四六
○平塚驛……四六
平塚町……四六
大山雨降神社……四八
馬入川……四九
○大磯驛……五〇
大磯町……仝
虎子石……五一
大磯海水浴場……五三
鴫立澤……五四
○二ノ宮驛……五六
○國府津驛……五六
酒匂川……五七
小田原町……五八
小田原城……六〇
早雲寺……六一
石橋山……仝
熱海温泉……六二

湯本温泉……六三
○松田驛……六四
大山雨降神社……仝
○山北驛……六五
箱根町……仝
蔦の湖……仝
足柄古關の趾……七一
○小山驛……七三
○御殿場驛……七三
御殿場……仝
○佐野驛……七三
佐野濱田……七四
○三島驛……七四
三島町……仝
三島神社……七六
富士山……七七
○沼津驛……八三
沼津町……仝
我入道及牛臥海水浴場……八四
千本松原……仝
○原　驛……八五
原　町……仝
○鈴川驛……八七
田子の浦……仝
吉　原……八九
曾我兄弟の墓……九〇
富士の裾野……九一
○岩淵驛……九一
身延山久遠寺……九二
富士川……九三
○蒲原驛……九五
蒲原町……仝

油井町……九七
○興津驛……仝
興津町……仝
清見寺……九八
三保松原……一〇〇
○江尻驛……一〇一
江尻町……一〇二
清水港……仝
○靜岡驛……一〇三
靜岡市……仝
駿府城……一〇五
淺間神社……仝
久能神社……一〇六
阿部川……仝
鞠子……一〇七
○燒津驛……一〇七
燒津……一〇八
宇津谷嶺……仝
岡部町……一一一
○藤枝驛……一一一
藤枝町……仝
蓮生寺……一一三
志太鑛泉……仝
○島田驛……一一三
島田町……仝
大井川……一一五
○金谷驛……一一八
金谷町……仝
菊川の里……仝
小夜中山……一二〇
○堀ノ内驛……一二一
日坂村……仝
○掛川驛……一二三
掛川町……仝
○袋井驛……一二四
袋井町……仝
可睡齋……一二五
○中泉驛……一二五
見附町……仝
○天龍川驛……一二六
天龍川……一二七
○濱松驛……一二八
濱松町……仝
濱松城趾……一二九
諏訪神社……一三〇
五社神社……仝
三形原……仝
○舞坂驛……一三一
舞坂町……一三一
濱名湖……一三三
○荒井驛……一三四
荒井町……一三五
白須賀町……仝
○二川驛……一三七
二川……仝
○豐橋驛……一三八
豐橋町……仝
豐川稻荷……一三九
○御油驛……一四〇
御油村……仝
赤坂村……一四二
○蒲郡驛……一四三
藤川村……仝
○岡崎驛……一四四

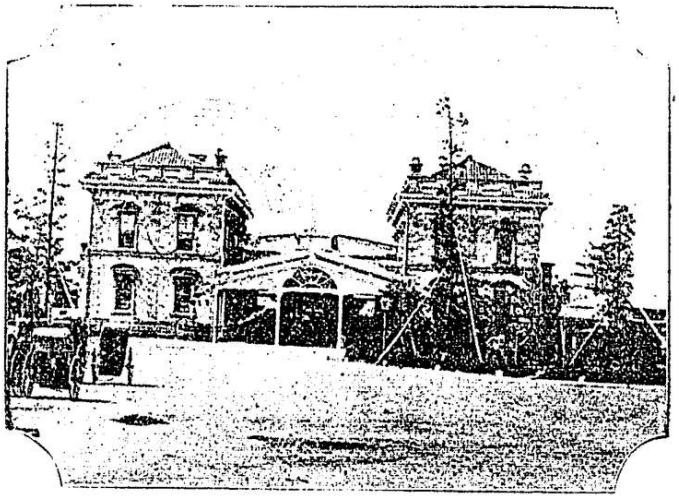
岡崎町……一四六
岡崎公園……一四七
大樹寺……仝
矢矧川……一四八
○安城驛……一四九
○刈谷驛……一四九
知立町……仝
八橋の古蹟……一五〇
○大府驛……一五二
○大高驛……一五三
桶狹間……仝
鳴海町……一五五
○熱田驛……一五六
熱田町……一五八
熱田神社……一五九
白鳥陵……一六一
○名古屋驛……一六一
名古屋市……一六二
名古屋城……一六三
○清洲驛……一六三
小牧山……仝
○一ノ宮驛……一六四
○木曾川驛……一六四
木曾川……仝
○岐阜驛……一六四
岐阜市……一六五
稻葉山……仝
長良川の鵜飼……一六六
○大垣驛……一六七
大垣町……仝
養老瀧……仝
谷汲寺……一六八

○垂井驛……一六九
南宮神社……仝
○關ヶ原驛……一七〇
關ヶ原古戰場……仝
伊吹山……一七一
寢物語の里……仝
不破の關……一七二
○柏原驛……一七四
○長岡驛……一七四
○醒ヶ井驛……一七四
醒ヶ井……仝
○米原驛……一七五
○彦根驛……一七五
彦根町……仝
多賀神社……一七六
○河瀨驛……一七六
○能登川驛……一七六
○八幡驛……一七七
○野洲驛……一七七
○草津驛……一七七
草津村……仝
三上山……一七九
野路の玉川……一八〇
○馬場驛……一八一
大津市……仝
志賀の都趾……一八三
打出の濱……一八四
膳所……一八五
琵琶湖……一八六
近江八景……一八七
石山寺の秋の月……一八八
瀨田の長橋……一八九
粟津の晴嵐……一九〇

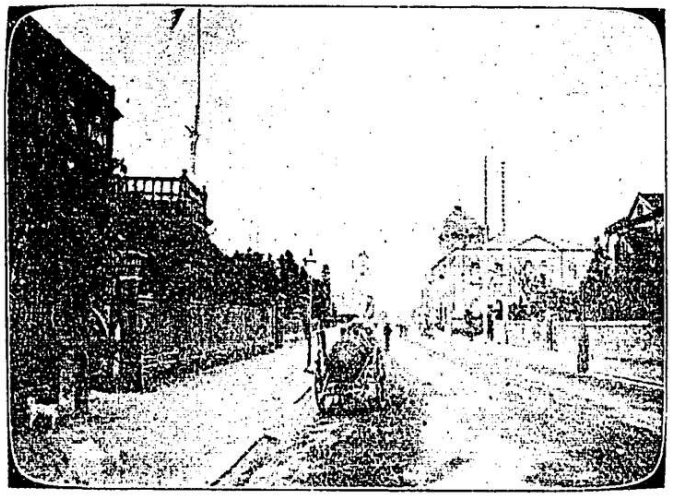
矢橋の歸帆……一九二
三井寺の晩鐘……一九三
堅田の落雁……一九四
比良の暮雪……一九五
唐崎の夜雨……一九六
日吉神社……一九八
○大谷驛……一九九
逢坂山……仝
走井……二〇〇
逢坂關……仝
圓寺小町の跡……二〇一
關清水……二〇二
關明神……仝
○山科驛……二〇三
大石良雄假居の趾……仝
○稻荷驛……二〇四
稻荷神社……二〇四
伏見町……二〇五
鳥羽の戀塚……二〇八
淀村……仝
宇治町……二一〇
平等院鳳凰堂……二一一
黃檗山萬福寺……二一二
○京都驛……二一三
京都市……二一四
東山……二一六
如意ヶ嶽……二一八
禁裏御所……二一九
二條離宮……二二二
加茂川……仝
三條大橋……二二三
四條大橋……仝
五條大橋……二二四
泉涌寺……二二五
東福寺……仝
三十三間堂……二二六
帝國京都博物館……仝
豐國神社……二二七
大佛殿方廣寺……二二八
西大谷……二二九
清水寺……仝
八坂神社……二三〇
祇園新地……二三一
圓山公園……仝
東大谷……二三二
知恩院……仝
南禪寺……二三三
黑谷光明寺……仝
談合谷……二三四
銀閣寺……二三四
西陣……二三五
下加茂神社……二三六
上加茂神社……仝
金閣寺……二三七
紫野大德寺……二三八
北野神社……仝
六角堂……二三九
本能寺……二四〇
新京極……二四一
西本願寺……仝
東本願寺……仝
東寺……仝
比叡山……二四二
愛宕山……二四三
鞍馬山……二四四

風　山……二四六
三尾山……二四七
○向日町驛……二四八
○山崎驛……二四九
天王山……仝
男山八幡宮……二五〇
○高槻驛……二五一
○茨木驛……二五二
總持寺……仝
勝尾寺……仝
○吹田驛……二五二
箕面公園……二五三
○大阪驛……二五三
大阪市……仝
第五回內國勸業博覽會……二五六
大阪築港……仝
水　道……二五七
淀川改修工事……仝
三大橋……二五八
天滿天神……二五九
中の島公園地……仝
豐國神社……仝
木村重成の石碑……二六〇
大阪納凉……仝
津村御堂……仝
難波御堂……仝
阿彌陀ヶ池……仝
四ツ橋……二六一
道頓堀と千日前……二六二
高津宮……仝
四天王寺……二六四
天下茶屋……二六五
生國魂神社……二六六
櫻　宮……仝
造幣局……二六七
泉布觀……仝
博物場……二六八
大阪城……仝
櫻井驛……二六九
四條畷神社……二七〇
○神崎驛……二七一
尼ヶ崎……二七二
箕面公園……仝
有馬溫泉……二七三
○西ノ宮驛……二七五
大國主西神社……仝
打出の濱……二七六
○住吉驛……二七六
住吉神社……二七六
岡本の梅林……二七七
○三ノ宮驛……二七七

目　錄　終



新橋停車場



横濱市街

九鬼隆一君序　小松原英太郎君序
田邊爲三郎君序　本山彦一君跋
井上經重君著

訂正増補 **兒島灣開墾史**　（再版）
定價參拾五錢　郵稅六錢

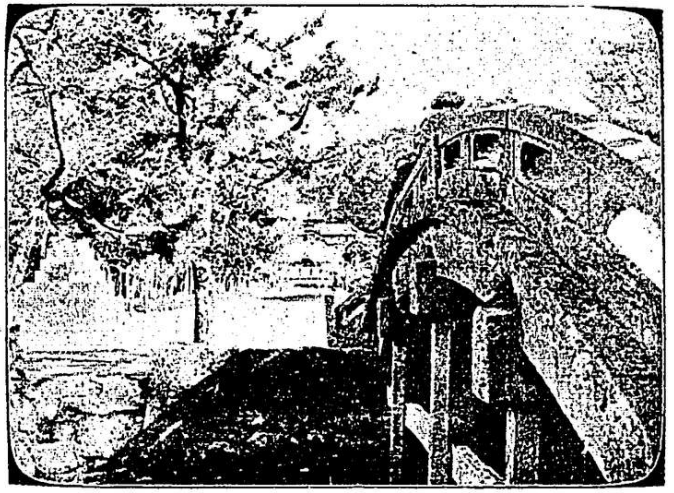
兒島灣開墾史附錄 **開墾工事方法**　（挿圖）
定價參拾錢　郵稅四錢

岡山縣兒島灣開墾事業は明治年間の一大事業也世の事業に志ある者此開墾史を看よ◎海底の泥土深さ數百尺其上に堰堤を築き水間を設け既に米麥を耕作す（此工事方法は博覽會農業館に出品あり）博覽會大阪府賣店にても發賣す

第五回內國勸業博覽會 **第一等賞牌受領**

大阪市東區備後町四丁目
電話番號東一〇四二番

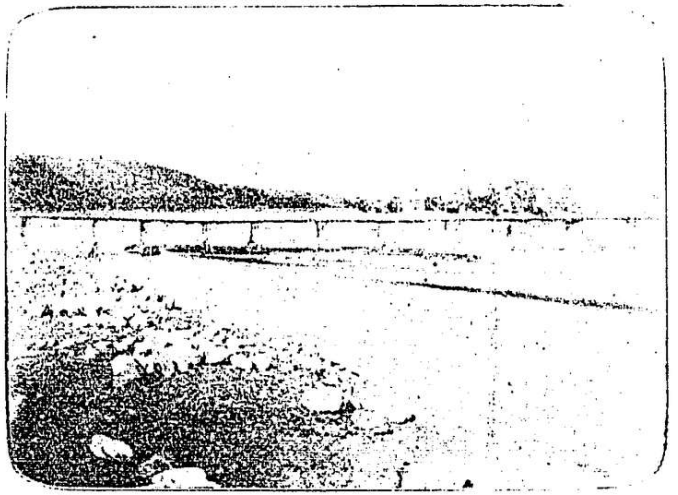
岡島書店



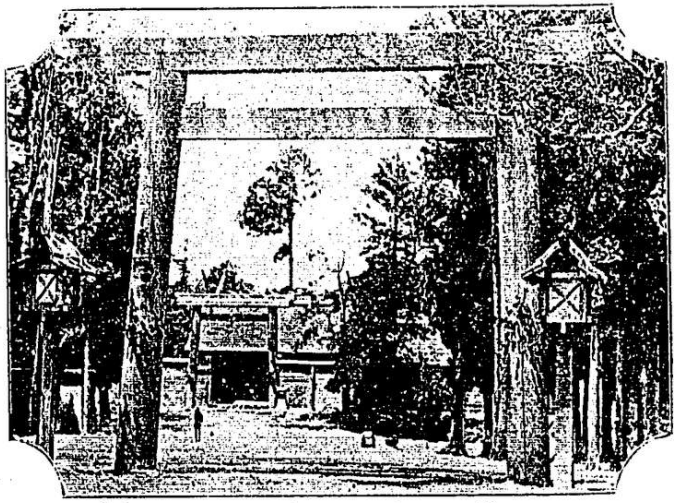
鎌倉八幡神社



江之島遠景



富士川より富士遠望



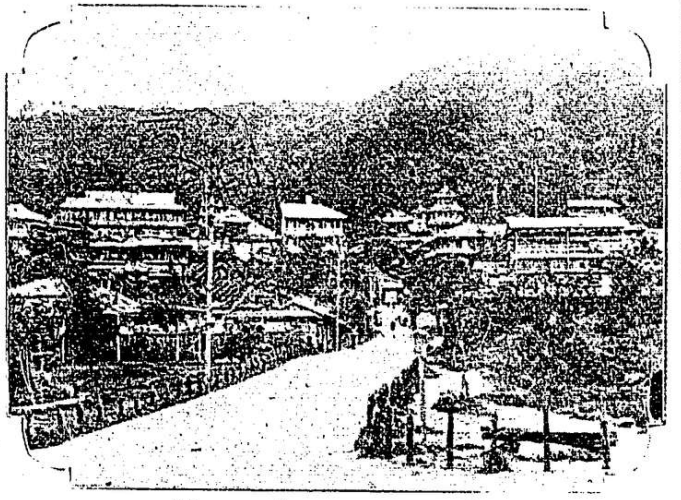
熱田神社



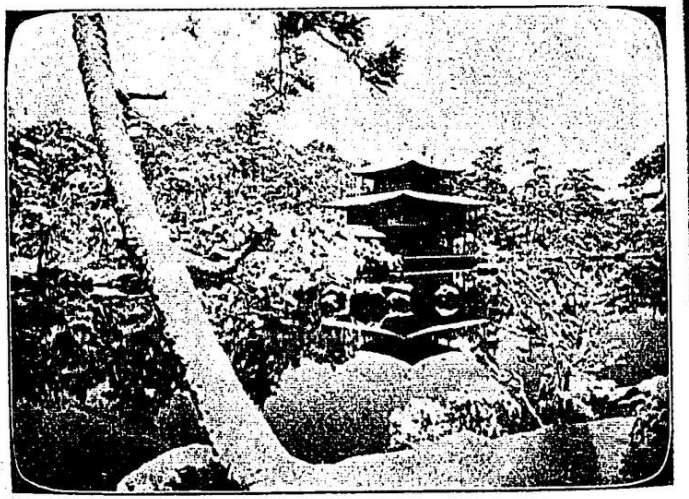
名古屋城



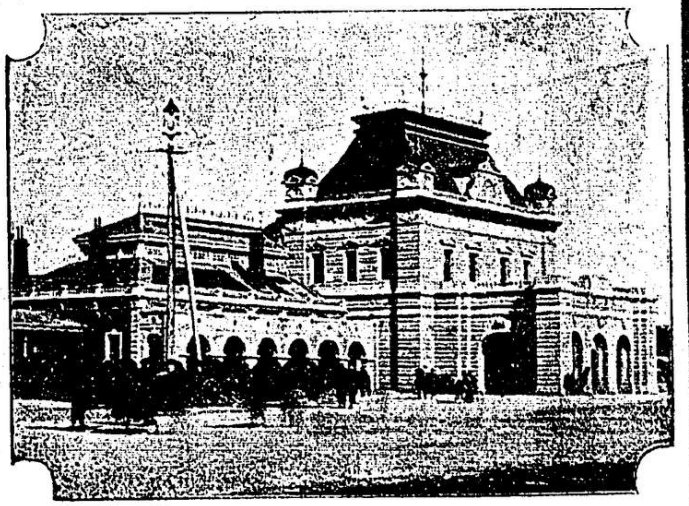
石山寺



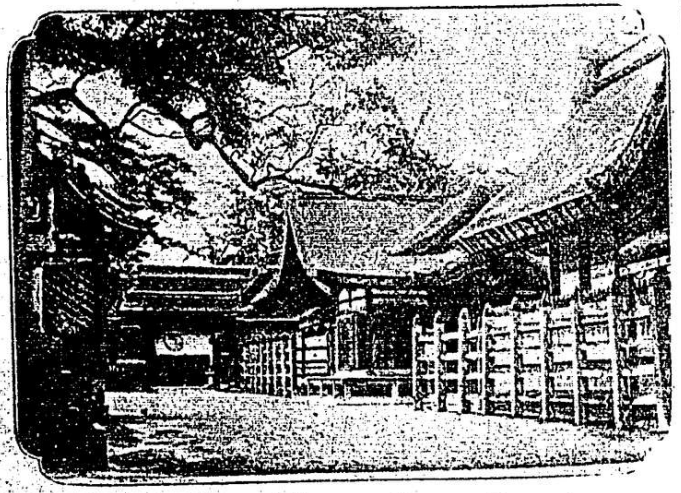
圓山公園



金閣寺



梅田停車場



住吉神社



旅行する人の心得

東輝文著
水谷不倒閲

○荷物は成るべく手輕に持ち革包又は行李は七分目に詰めてキッシリ一杯にせぬがよいそれは途中にて買物などする時の用意です。

○旅行中の必要品は衣服の着替、襦袢、シャツ、の類、其外筆、紙、墨、鉛筆、手帳、郵便切手、葉書、楊枝、歯磨、電報頼信紙、鋏、小刀、栓ぬき、手拭、時計、磁石、マッチ、懐中洋燈、病氣用寒暖計、糸及び針、毛布、地圖、薬品、風呂敷、洋傘、腹巻、旅行用化粧箱、鞄、柳行李、晒木綿、油紙など旅行者の身分、旅行の目的、

長短等によりてそれ相應の準備が要るでせう

○旅行する人の第一に必要なものは金錢であるから是には尤も注意しなければなりませんもしも途中で失つたり奪られたりすると非常に困るから小遣錢だけは財布なり墓口なりに小出しゝて置いて其外は胴卷に收め肌へ付けて居るがよろしい尤も小出しするときは夜分にても人目にかゝらぬ樣にし、若し大金を携ふるならば行先へ爲替を組で置けば掏摸にとられる憂もなく誠に安心である又懐中してねても確實な宿ならば大金は直ぐ帳場へ預けて置くが大丈夫です

○旅裝は男女とも身輕に打立つのが便利です男は洋服もよいが平民的旅行には和服に股引下駄と出掛くるが第一ですろして徒歩旅行の人は出立の初めには殊更に足を靜に踏み立て履物の加減等を能く試み度々休みて足の痛まぬやう踏馴すが肝要です出立の當座には心速

りて思はず知らず休みもせず歩む爲めに翌日は疲勞に堪えぬといふ例はいくらもあるから一寸注意して置きます

○道中茶店等で休む時靴、草鞋のまゝ足をさげて腰掛けるはよくない其時は少しの間でも履物をぬぎ上へ上りてかしこまり休むがよい又足へ肉刺を踏出すは、みな草鞋のはきやう塩相なると足乾き熱する故であるから能く草鞋を叩き徐々と踏馴すがよい

○草臥て足が痛むときは風呂に入て後鹽を足のうらになすりつけ火にてあぶるか又は燒酎を足の三里より下に吹付くるも効能がある、なほ土踏まずのところ腫れ痛むには蚯蚓を泥のまゝ摺り潰して塗るとよいようです

○汽車汽船では草臥ることも少く足に肉刺の出る心配もないが徒歩旅行には馴たる人さへ肉刺が出來ることがある其時は肉刺を針にて

潰し水をとり其あとに半夏の細末又は煙草の吹殻或は鹽飽粉を飯粒で練てはるがよいさすれば痛みも止り翌日歩くに少しも差支がない

○徒歩旅行にて格別急ぐことなくば夜道は成るべく避るがよい都て旅行するには九日路なれば十日にて行かんとすれば急ぎて夜道するよりもまだ益多きものです若し都合ありて山越又は夜道する時は紺色の足袋脚絆を着けるがよい爾すれば蝮蛇に咬まれませぬ

○旅宿に到着してから第一に其地の東西南北を聞き定め次に家作り便所裏表の口々等を見覺ゑ置くことは昔よりの教へですが強ち舊弊とは笑はれませぬこれは近火、盜賊又は相宿に喧嘩騒動等ある時の用意です

○蚤を避くるには蚤とり粉を持參するが一番よいがなほ之に類する一二の法を擧げて見やうなら苦參といふ草は和名くらゝ又はきつね

のささげといつて葉は槐に似花は赤小豆の如く根は黃白色にして嘗めて見ると苦い、此草を生の儘に床の下に入置けば蚤が寄らぬ此草は野山にいくらもあるから道すがら手折て敷くとが出來る又枳實を澤山煎じ之に襦袢を浸し能く干して着用してもよい、なほ枳を一つ抱きて寢ぬるか又は蔘を乾て床の下へ敷ても效能がある

○神社佛閣又は宿屋等の手洗場に懸けてある手拭にて手や口をふくことは決してするものでない此手拭から意外の病氣を引受けることがある

○諺にも病は口より入るといへば飲食物に注意せねばならぬとは今更申までもなきことなれど旅行中は一層氣を付けてをらねば意外に難義することがあるたとへば渴きしとて知らぬ谷川の水や粗製のラムネを飲み空腹になつたとて腐れかゝりし壽司蟲つゝれの古菓子

なぞを食することは忘れてもすまじことです

○旅行中相客、行商人又は道連れなぞ慣れ〳〵しく親近き菓子、煙草、或は薬なぞをくれることがあつても迂濶には貰はれませぬ、時としては賊が睡眠剤を投じ旅客の精神を麻酔せしめ油斷を覗ひ金品を窃取するとがないともいはれぬ他人が物を勧めても成べく敬して遠くるの策を取るのが肝要です勿論入用の場合には其れ〳〵の商店について求るのです

○汽車が各所の驛に着きますといろ〳〵飲食物を賣りに來ますが中には如何はしき物もあるから能く〳〵吟味して買ふがよい成べくは乘車前に確實な店に就て買ふに越したとはありません茶の如きは吸筒又は瓶なぞに詰めて携もるも一方法です

○汽車に乘るに慣れたる人は格別だが慣れぬ人は隨分紛付ことがあるから其緊要なもの一二を記して置きませう

一切符を買ふ時　鐵道の旅客賃金は何れの停車場にも掲げ示して有るから發車時刻前に停車場に行き行先迄の賃金を見て過不足なきやう其賃金を用意し切符を買ふとき成るべく釣錢を取らぬ樣にするがよい釣を取り小錢を出すときは手數と時間がかゝり自他ともに乘車の不便となる計りでなく釣錢不足の爲め切符の賣出しを謝絶せらるゝことも往々ある、切符と釣錢とは出札所の窓を離るゝ前に改め置かねば後ちに間違を見出すも致方なきものです

一列車の發着時刻　は停車場に掲げてあるから此時刻を間違へぬやう行くがよい發車時刻より少し前に停車場の戸口を閉め旅客の出入りを止るから之に後れぬやう注意せねばなりません

一切符の効力は短き距離なれば切符面に記してある宛名驛まで乘すべき一度の用に立つのみにて下車驛にあらざる驛に下車するときは其効力を失ひ又長き距離の乘車切符は三日又は四日と通用期のあるものもあり其通用期を過さぬやう心付けねばならぬ

一手荷物は旅客一人に付一等が百斤二等が六十斤三等が三十斤と制限があつて其れ以上の手荷物になると一斤に付廿五哩まで一錢五十哩まで一錢五厘百哩まで二錢以上五十哩毎に一斤に付五厘づゝの賃金を要するのです

一手荷物預け方は發車前少なくも十五分前に乘車する停車場の手荷物掛に乘車切符を示して其荷物を渡すのですが若し後るゝ時は自分の乘り込む列車の間に合はぬことがある又途中の驛で用事あつて下車する時は手荷物を其驛に預けて置くことが出來る然る時は重量三十斤以下ならば一日金一錢三十斤以上百斤迄は一日金四錢を拂へば二十四時間停車場で預つて呉れる若し二日預けるには四錢又は八錢を支拂ふのです

一手荷物合符とて無賃手荷物を預けたときは必ず引換の合符をくれるからそれを持て居て着驛にて之と引換に荷物を受取るのですが萬一合符を失ふときは其代金をとられ又手荷物受取に付て手數がかゝるから大切に持て居らねばならぬ

官設鐵道東海道線の位置

官設鐵道は東京より靜岡、名古屋、京都、大阪を經て神戸に到る三百七十五哩の間が本線で此間を直通する列車は毎日四回ある內急行が二回あつて其時間は僅かに十五時間で神戸より東京に到着される

本鐵道は神戸にて山陽鐵道に接續するの外越中富山より金澤、福井を經京都にて本線に合する支線がある、又關西鐵道は名古屋、草津大阪の三ケ所にて、阪鶴鐵道は神崎にて何れも此官線に接續する。

さて東京より京都に至る迄の線路は昔の東海道五十三次と時には離れ時には横ぎりて右になり左になり屈曲離合素より同一にはならざるも其大部分は先並行してゐると云てよろしい、是からして官設の東海道線に於る各驛を本とし一方には往昔飛脚や駕籠屋の相往來せし舊街道即ち五十三次を並記してお愍に供する

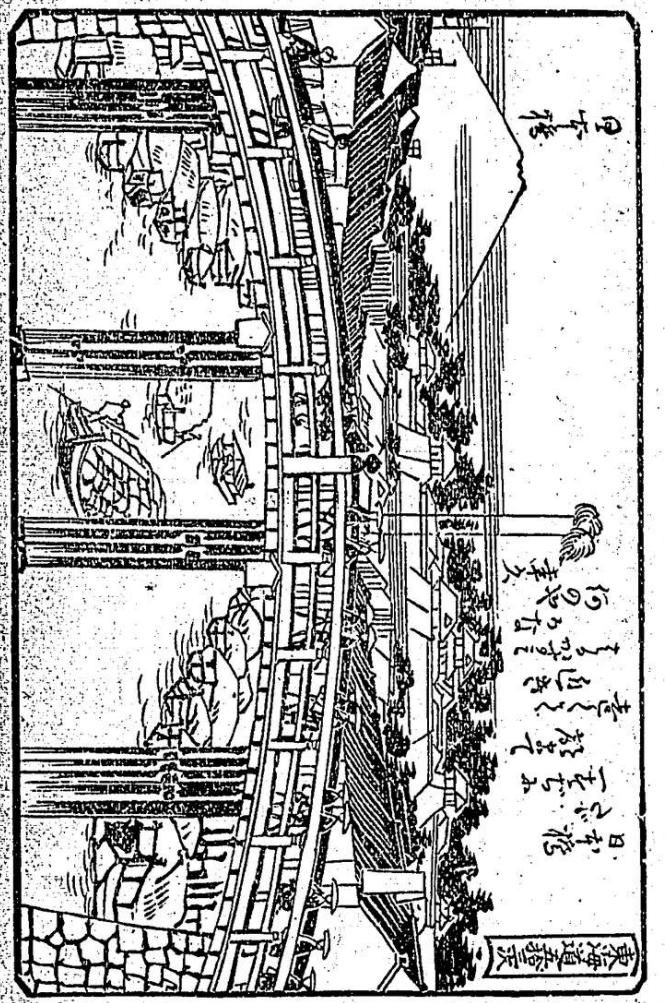
新橋驛　下り品川へ三哩十八鎖　神戸より三百七十五哩二鎖

五十三次の
のり出し

日本橋

品川へ一里一町　京都より百二十八里三町

新橋は東京市の西南部にありて東海道線の基點にあたり一晝夜に四十五回發車するのが通例にて此外臨時滿車を發することもある



から瀛車發着前後には昇降の客群集するもの夥しきに拘らず道は官設鐵道の首驛だけありて秩序整然毫も混雜することがないので旅客が不便を感ずるなどのことはありません今便宜のため當線路内の重なる各驛へ至れる賃金表を左に掲げおきます

東京市内のことはいくらも書物に著はしてありますから茲にはほんの概略を述べるのみです

東京市は我大日本帝國の首府で關東平野の中央に位し東は隅田川に臨み南は東京灣を控へ地勢廣濶にして東西二里半南北三里半に亘る大都會人口は百四十四萬許りある

皇城は市の眞中なる舊江戸城の跡にありて周圍は凡二里七地高燥にして老木の松打繁り誠に千代田の名に背かず城を周らす溝渠には水湛々として絶えず赤阪には離宮があつてこゝには皇太子殿下がお出になり諸官省は宮城の内外にあり其他公共の建物學校諸會社等は諸所に散在し日本橋、京橋、神田等は東京の最も目貫にして商家櫛比し百貨一として辨せられぬといふことはない道路は極めて廣く車馬絡繹、夜は電燈全市を照して晝を欺き往來織が如く水陸の交通運輸、自在なるといふまでもなく關八州信越、東北地方さては北海の物産は概ね此地に集散して實に我國政治、軍事、學術及經濟の中心點である

市内は麹町、神田、日本橋、京橋、芝、麻布、赤阪、四谷、牛込小石川、本郷、下谷、淺草、本所、深川の十五區に分かれ遊覽すべき場所には芝、上野、淺草、日比谷公園をはじめ愛宕山、隅田川、靖國神社等枚擧に遑あらず

市内より八方に開かれたる街道にて四宿街道の一つなる奥羽街道

は千住より起り中仙道は下板橋よりはじまり甲州街道は内藤新宿より、東海道へは品川より跼み出す、又鐵道線路にては中仙道と東北鐵道とは上野より起りて奥羽と北陸とに達し甲武鐵道は飯田町より發して八王子川越等に至り總武鐵道は本所を起點として佐倉に至り東海道鐵道は前記の如く新橋より出でゝ京阪神に赴くのです

市内重なる旅館は市國ホテルを始とし芝口に衆星館、吾妻屋、京橋に中央旅館、紅木屋、山城軒、桃李館、對山館、築地に金水館木挽町に水明館、厚生館、萬屋、加賀屋、日本橋に名倉屋、島屋島鐵、伊東屋、西貝、樋口屋、安川、末廣館等が名高くして其外普通の旅舍は到る所にあるが日本橋、馬喰町は最も多い斯かる賑はしき大都會も今より三百年前は武藏野と云つて誠に寂しい荒原でした尤も其所には太田道灌が築いた小城がありましたが天正十八年德川家康が地の利を相して遂に其居城を茲に移し三百の諸侯を參覲交代せしめ邸宅を構へさせて日本全國の武士の半數もこゝに集めたのであるから繁榮は日に月に增し昔しの大江戸をなしたのであるが維新の際は幕府と共に既に瓦解せんとしたるを鳳輦一度こゝに駐り往昔の繁榮を保つのみならず爾來日本の首府として更に舊來の面目を一新し今では東洋第一の大都會となつたのです

●日本橋　は日本橋區通り一丁目と室町一丁目との間に在りまして市の眞中に位し全國各地に至る里程の起點です此橋より京都三條橋までの里程は百三十里二十四町（舊街道は百二十八里三町）維新前までは此間に宿次五十三ありて之を東海道五十三次と稱へたこ

とは今も皆の記憶に存じてをります、なほ日本橋より東海、山陽
両道中の府縣所在地に至る里程を掲ぐれば斯です

神奈川へ　八里八丁　　京　都へ　百三十里二十四丁
靜　岡へ　四十八里廿七丁　　大　阪へ　百四十三里廿六丁
愛　知へ　九十六里廿二丁　　兵　庫へ　百五十里廿一丁
三　重へ　百十四里廿三丁　　岡　山へ　百八十八里廿四丁
岐　阜へ　百六里七丁　　廣　島へ　二百三十四里一丁
大　津へ　百二十九里九丁　　山　口へ　二百六十八里三十丁

癸未九月發二江戸一　　林　春　齋

十歳移レ家在二武城一　今歸二故里一是公程。
回レ頭天外京師路。　一歩從レ茲千里行。

仲秋出二江府一　　山崎闇齋

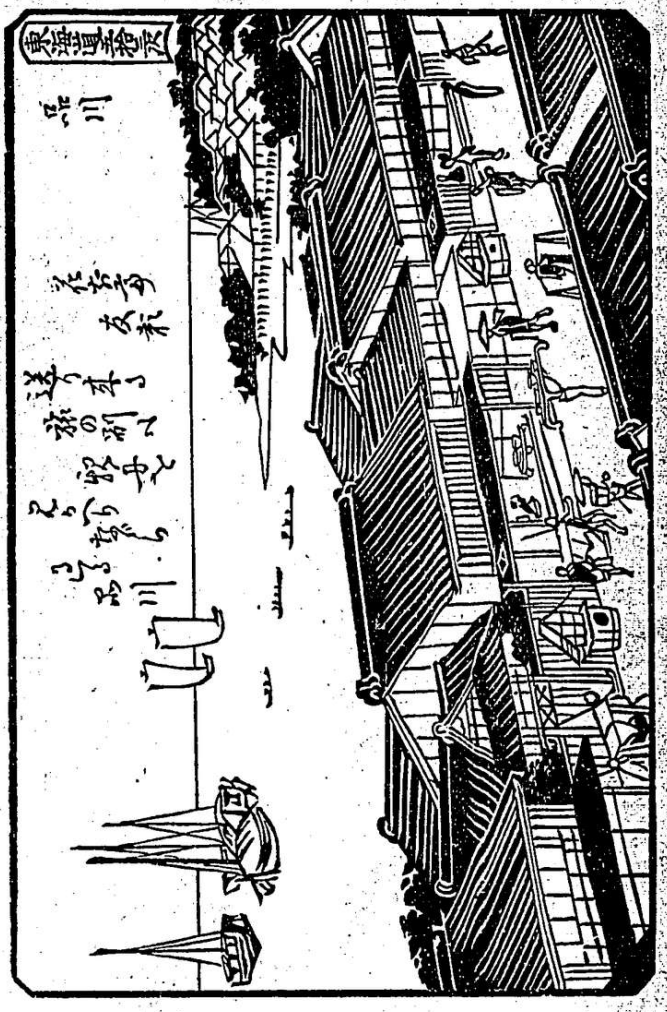
送レ春涉レ夏又逢レ秋。　遊子晨昏憶二帝州一。
今日倭裝乘馬了。　歸鞭輕颺武江陬。

品川驛

●五十三次の第一宿　品川　日本橋へ二里一町　新橋より三哩十八鎖
川崎へ二里四十町　神戸より二百七十四哩九鎖
日本橋より二里一町　京都より百二十六里二町

驛は武藏國荏原郡品川町にあり赤羽線に續く支線があつて日本鐵道と甲武鐵道とに接續してゐるから其方面へ行く人はこゝで乘りかへをする

●●●品川町は東都の咽喉で昔しは東海道五十三次の首程となつてゐたから今も人口二萬餘の繁華の町で旅舍も多く昔しの宿場として妓樓軒を列ね絲竹の音今様の歌艶はしく頗る賑ふ東の方品川灣には軍艦常に碇泊し茲に舊幕時代に築かれたる七個の砲臺あり俗に品川のお臺場なるもの、



過二品川海邊一望二見房州遠嶺一　林春齋

遙指房陵波浪天。白雲堆裏翠螺群。
卓眉如レ入二長鄉眼一。海上遠山誰不レ憐。

品河　山崎闇齋

驛次指來到二品河一。僕僮促促事二驅馳一。
海亭暫立眺望外。不レ動雲間知二筑波一。

品川初春狂詠　松濤芙蓉花

元朝にいはふことばの品川やはなのお江戸の春の入口

品川にふじの影なき汐干哉　闇指

しな川や塵をはなれて啼鵆　百丸

すゝしさの土佐殿見たり上總山　涼菟

●●●東海寺は品川町に在る禪寺にして開山は澤庵漬の發明者なる澤庵

和尚で寛永十四年徳川家光の創建ですもとは寺域も廣く壯麗を極めてゐたが惜いかな維新の際殿堂灰燼となりて今は殆ど舊觀を止めず澤庵和尚の墓は其附近に自然石の建てゐる所です

海晏寺 は品川町の南端に在る曹洞宗の古刹で北條時賴の開基に係り古より楓樹の名所として知られてある境内には北條時賴及び明治の功臣贈太政大臣岩倉具視の墓がある

海晏寺觀楓　大槻盤溪

落木城南趁二晩晴一　寒山曲曲踏レ紅行。
殘陽倒照高楓上。一半糢糊一半明。

御殿山 は品川町にある櫻の名所で元太田道灌の館のありし所、春風胎蕩百花爛熳の頃は雅俗來り遊ぶもの頗る多し

御殿山　大沼枕山

縱橫舖席遍二平岡一。林婦招レ人媚二夕陽一。
一串藜祈半饞肉。大櫻樹下嗽二春洋一。

殿山觀レ花　僧梅痴

芳林閃濫觀二斜陽一。一半山光接二海光一。
行殿無レ基春草合。風花空舞白霓裳。

兼盛

世の中にうれしきものは思ふとち花見てすぐす心なりけり

典仁親王

吹ときはなか〳〵空にたゝよふてよはるあらしにちる櫻哉

泉岳寺 は芝區高輪町にある曹洞宗の寺院にして境内に赤穗城主淺野長矩と其臣大石良雄等四十七士の墓があつて參詣者の香花常に絕もることなく其事蹟は世の沿く知る所です

泉岳寺　藤田東湖

古塚纍々四十七。蓄苔豈得レ埋二精忠一。
徘徊欲レ問當年事。唯有二孤松鳴一海風一。

泉岳寺謁二義士墓一　中井竹山

雪レ心酬レ恩同殺レ身。招提下レ馬淚沾レ巾。
圭碑數隊苔紋古。嶽雪千秋義氣新。
牛耳燕門裏二甲夜一。驄蹄京洛踏二花晨一。
從來奇事多二奇姤一。不レ怪當年弄レ筆人。

過泉岳寺　大槻盤溪

三蹶擊衣未レ成レ事。殉身海島亦徒爲。
何似援他國讎首。淋漓血滴故君碑。

大森驛　上り品川（二哩五十八鎖）下り川崎（四哩十二鎖）　新橋より五哩七十六鎖　神戸より三百七十一哩十七鎖

驛は武藏國荏原郡の南端入新井村新井宿に在りて、より川崎大師に參詣するには電氣鐵道がある

●●●八景園　は驛の西隣に在りて、古へは交通繁き街道に方り八景坂と稱せし所今は丘上を拓きて梅櫻を植ゑ茶亭などを設けて風致を添ゆ

●●●●蒲田の梅林　蒲田村國道の傍に在り春時花の滿開して幽香馥郁たる頃は騷人雅客の杖を曳くもの多く名物としては梅漬梅びしほの類を賣つてゐる

●●本門寺　は驛の西南二十七丁池上村にあり寺は弘安四年池上宗仲の創建に係り開山は日蓮上人甲州の身延山總州の正中山及び當山とを以て法華の三頭と號けて有名な寺です堂塔伽藍毎年十月十二、十三、十四の三日間に行はるゝ一大會式には善男善女の諸方より參詣するもの雑を接す近頃本堂火災に罹り殿堂未だ舊に復さね

●六郷川　は當驛と川崎驛との間を流れてゐる多摩川の下流をいふので六つ玉川の一つです源は信濃より出で甲斐國を通り當郡羽田村に至りて海に入る新田義興の戰死せし矢口の渡はこゝより少し川上です

六郷橋　　山崎闇齋

流水潺湲通二海潮一　馬蹄送去六郷橋
不知何日稅二征鞅一　地廣天長驛路遙

讀人しらず

玉川にさらす手つくりあらくにむかしの人の戀しきやなぞ

寄六郷川歲暮狂詠　　魯谷

一のうら六郷川やひりかけにあらねとけふとなつたさいまつ
螢火やなき玉川のもめのあと　　蘿島

川崎驛

上り大森へ四哩十二鎖　新橋より十哩八濱
下り鶴見へ二哩十七鎖　神戸より三百六十七哩五鎖

●五十三次の第二宿　川崎　品川へ二里三十三町　日本橋より四里三十四町
神奈川へ二里十八町　京都より百二十三里五町

驛は武藏國橘樹郡川崎町大字堀ノ内に在り

●川崎町　は東海道第二の宿次にして人口五千許り商戸軒を列ね旅店妓樓も澤山ある重なる旅舍は朝田屋春日屋萬年屋

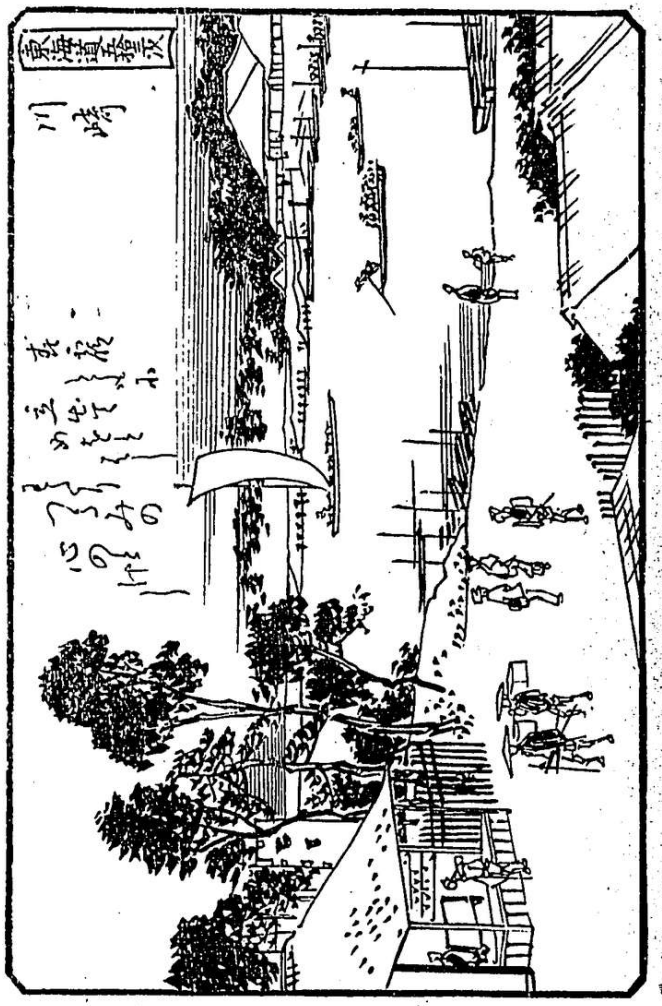
河崎　　山崎闇齋

日午到二河崎一　停レ鞭催二一炊一　亭中憑レ杜坐
梧葉傍レ檐垂

川崎初春狂歌　　中村花谷

はるかせのたつより今朝はさきろめて匂ふや梅のかはさきの宿

●川崎大師堂　は驛の北端より六郷川の堤に出で半里許りを歩みますれば寺門に達します寺は曹洞宗平間寺と稱へ本堂には弘法大師が



安置してある此像は今より七百七十餘年前大治年中當地の漁夫平間某が海中より得たるものにて今猶木像に貝殻が着いてゐるといふ園内には假山泉石風致を添へ毎年一五九月の廿一日及び三月二十一日には遠近の賽人雲の如く集り雑閙いはん方なし此時は新橋川崎間に臨時汽車が發せられる

小向梅林　驛より二十五丁御幸村大字小向村に在り全村皆梅を栽ゑてゐるから春は芳香馥郁として空に充ち飛絮紛々として面を撲ち實に安養淨土の極樂世界とやいはん昔は村内梅の實を醃ぐを以て業となし花を顧るものもなかつたが津田仙、成島柳北氏等が其佳景を賞してより其名遽かに著はる

鶴見驛　上り川崎へ二哩十七鎖　新橋より十二哩二十五鎖
　　下り神奈川へ四哩　神戸より三百六十四哩六十八鎖

驛は武藏國橘樹郡生見尾村大字鶴見に在り

神奈川驛

上り鶴見（四哩
下り平沼（六十二鎖

新橋より十六哩二十五鎖
神戸より三百六十哩六十八鎖

第三宿 神奈川

川崎（二里十八町
程ヶ谷（一里十三町

日本橋より七里十六町
京都より百二十里二十三町

驛は武藏國橫濱市高島町にあり

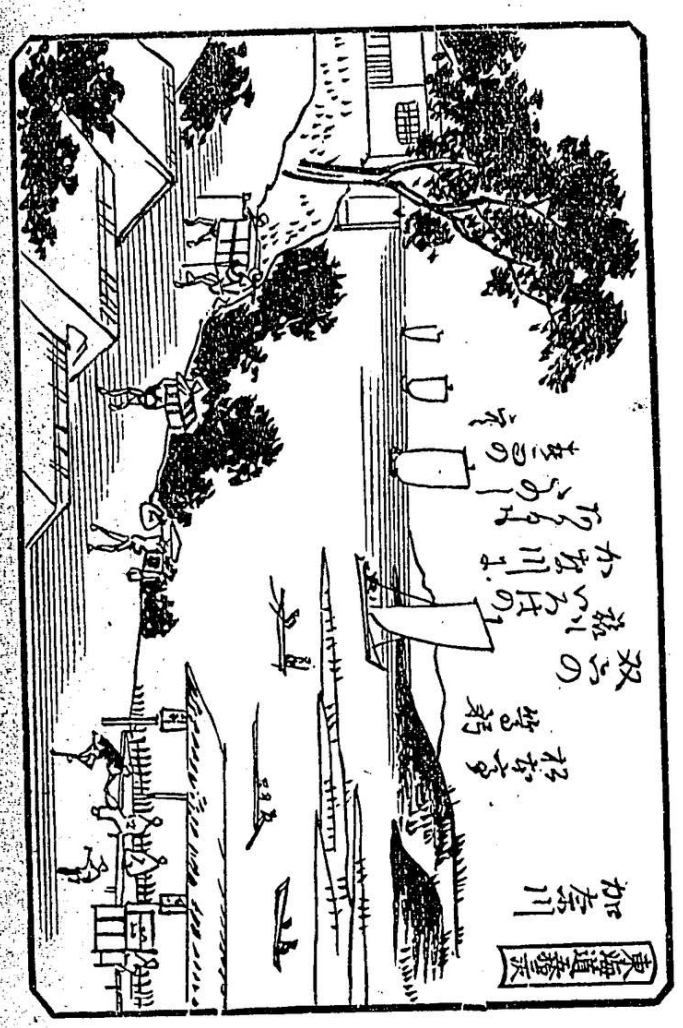
神奈川町は東海道第三の宿次にして町は長くくの字形をなし北に丘を負ひ東南は橫濱灣に臨み市街繁盛にして交通も便利です人口一萬九千許り旅店妓樓列り神奈川臺に登れば風景絶佳にして橫濱市とは僅かに十餘丁を隔つるのみ町內には本覺寺飯阪權現豐顯寺等がある旅館の重なるものは名古屋、田中屋等です

神奈川驛店夜聞二落葉一如レ雨　林春齋

唯言夜雨到來時。未悟秋風落葉吹。
檐際有レ聲無二點滴一。朗吟無可上人詩。

經金河歷帷子過程谷（帷子古驛也）

山崎闇齋



客館高詹神奈河。帷郵程谷亦豪華。
姦聲亂色誘人處。少壯飛揚似燭蛾。

神奈川初春狂詠　池田雅贇

のとかなるあら玉の春の書初はけにやはらかなかなかはの宿

横濱驛　上り平沼へ七十三鎖　下り程ケ谷へ二哩三十八鎖　新橋より十八哩　神戸より三百五十九哩十三鎖

驛は武藏國橫濱市櫻木町にあり

●●●横濱市　は東京市の西南八里八町本邦開港場の第一に位し神奈川縣廳の在る處で人口二十二萬許り全國第六の都會です此地元とは寂しき村落であつたが四十五年前即ち安政六年に外國交易場と定まりてから年々戶口增加して今日の繁盛となり豪商富戶軒を並べ外國人の居留するもの多く百貨輻輳し商業甚だ活潑にして瀛船の出入頗繁なり內外各港に來往する定期航海船は頗る夥しく遊覽すべきは居留地の伊勢山公園、旅宿は津久井屋、西村、松坂屋を始め數十軒を下らず

●●●杉田梅林　は橫濱より三里杉田村に在り地は海に臨み山を負ひ風色自ら秀でたるが上に槎枒たる梅樹は麓より山腹に蟠り雲霞を棚引き誠に仙境に至るの思ひがある

平沼驛　上り神奈川へ六十二鎖　下り橫濱へ七十三鎖　新橋より十七哩七鎖　神戸より三百六十哩六鎖

驛は武藏國橫濱市平沼町にあり

程ケ谷驛　上り橫濱へ二哩三十八鎖　下り戶塚へ五哩四十六鎖　神奈川へ一里十三町　戶塚へ二里十六町　新橋より二十哩三十八鎖　神戸より三百五十六哩五十五鎖　日本橋より八里二十九町　京都より百十九里十町

●五十三次の第四宿

程ケ谷　驛は武藏國橘樹郡保土ケ谷町大字保土ケ谷に在ります

●●●程ケ谷町　は東海道第四の宿次に方り人口四千五百餘、町の西南二十丁許り境木といふ所は武藏と相摸との國境です

程ケ谷初春狂詠　　内原蟻洞

旅立もけさは祝ふてくふ雑煮よいはゞがやのはるの明ぼの

同　狂詠　　十返舎一九

お泊はよい程ケ谷と泊め女戸塚前てははなざりけり

金澤八景　は驛の南四里久良岐郡の東南端金澤村に在りて南西北の三方は丘に圍まれ東一面は海に瀕して近く野島、夏島の小嶼を望み遠くは房總の峯巒と相對し山は青く水は清くして風光頗る佳絶、八景といふのは洲崎の晴嵐、瀬戸の秋月、小泉の夜雨、乙艫の歸帆、稱名寺の晩鐘、平潟の落鴈、野島の夕照、內川の暮雪などで何れも一里四方許りの間に在り此八景を一目に見ることの出來る所は能見堂で尙此八景の外に能見堂をも併せ見るによろしき九覽亭といふのがある

從ニ能見堂一眺ニ金澤八勝一記原漢文　　菊池三溪

金澤ノ勝ハ凡ソ耳有ル者晷鐍亦能ク之ヲ聞ケリ矣鎌倉誌ニ所謂八勝ノ眺矚能見堂ヲ以テ最ト爲ス信ナリ矣堂山ヲ負フテ而シテ海ニ面ス結構雅潔坐シテ而シテ之ヲ眺ム嵐光水色一矚瞭然之ヲ呼ヘハ響エント欲ス一沙彌有リ千里鏡ヲ出シ喋々指說ス乃チ鏡ニ對シ覗ヒ且ツ問フテ曰ク筆柱下土相連ツテ而ノ汀沙ヲ下ル者ハ何ソ邪曰ク平潟ノ落鴈。倒影樹ニ在リ茅屋水ニ臨ミ戸外ニ漁網ヲ晒ス者ハ何ソ邪曰ク野島ノ夕照。鯨吼殷々山ヲ出テ水ヲ下リ餘音春容底止スル所無キ者ハ何ソ耶曰ク稱名寺ノ晩鐘、烟靡キ雲颺ル矣曰ク洲崎ノ晴嵐ナリ樹暗ク山白シ矣曰ク內川ノ暮雪ナリ豆人寸馬簑往キ笠來ル矣曰ク小泉ノ夜雨。烟蒼ク水明ナリ矣曰ク瀨戸ノ秋月。鷺ノ斯ニ飛ブ如ク鳧ノ斯ニ翔ル如ク洲渚ノ

間ニ隠見スル矣曰ク乙艫ノ歸帆。八勝ノ觀畢ル矣又問フテ曰ク蜉蝣ノ春ツク如ク蠔蠣ノ集マル如キ者鳥乎曰ク漁者ノ網ヲ率ク也蜿蜒トシテ水ヲ飲ム者ハ虹邪曰ク橋也烏帽ノ如キ者ヲ帽島ト爲シ獼猴ノ如キ者ヲ猴島ト爲シ回汀曲灣綉峙綺錯悉ク寸眸尺幅ノ中ニ集マリ目數シテ而シテ指屈スルニ暇アラズ暮色蒼然遠クヨリシテ至ル焉忽チ壑舟ト爲ル矣悵惘之ヲ久フシ割愛ニ忍ビズ徘徊顧望山ヲ下ッテ而シテ去ル矣

●金澤文庫の舊蹟　金澤文庫とは建治年間北條實時が和漢の群籍を藏め置きし今いふ圖書館で其藏書中儒書には墨印佛書には朱印を以て金澤文庫の四文字を捺してわつたが兵亂の爲め文庫も廢壞し書籍も散逸して今は金澤村大字寺前に其古跡のみ殘つてゐる

●戸塚驛　上り程ケ谷へ二里十六町　日本橋より十一里九町
下り大船へ三哩四十鎖　藤澤へ二里　京都より百十六里三十町
神戸より三百五十一哩九鎖

●五十三次の第五宿戸塚　程ケ谷へ二里十六町　日本橋より十一里九町
藤澤へ二里　京都より百十六里三十町

驛は相模國鎌倉郡戸塚町大字戸塚に在り

●戸塚町　は東海道第五の宿次にして郡の中央に位し人口三千五百許り鎌倉へは二里二十二丁此地昔鎌倉の繁榮なりし頃は材木町でわつたろうです旅舍は伊勢屋鎌倉屋などです

十塚晩宿翁出而語予云。昔豪民爲盜殺越人于貨焉。謂下爲財貨殺上人。有夫妻過于此爲賊所殺。其妻爲鬼屢惱過客。一武人遇之問其情狀。鬼對陳以冤於是乎事覺。巨魁同黨共十人。悉梟于此。因名云爾（俗稱戸塚非也）是與漢藥亭之事異域同日之談也。山崎闇齋

周易慤勉乖戒懼。旅人可恐喪童心。

清時不有讒亭事。那倩漢朝王少林。

戸塚初春狂詠　　幡中紫玉

草臥てゐる旅人も元朝はとつかはと起て雑煮いははん

戸塚狂詠　　十返舎一九

泊めざるは宿を疝氣としられたり大金玉の名ある戸塚に

大船驛　上り戸塚へ三哩四十鎖　下り藤澤へ二哩六十七鎖　新橋より二十九哩四十四鎖　神戸より三百四十七哩四十九鎖

驛は相摸國鎌倉郡小坂村大字大船にあり

横須賀線は當驛より岐れ鎌倉又は逗子に行く人は乘りかへを忘れてはならん

●鎌倉　は當驛より横須賀支線第二次の停車場にして今を去ること七百餘年前源頼朝幕府を茲に開き天下兵馬の權を集めし以來北條氏の執政足利氏の管領相次いで茲に居を占め關東を號令した所で歴史上有名の地ですうれもゐ名所舊蹟も亦頗る多い

鎌倉懐古　　太宰春臺

穿レ山渉レ水苦相尋。　盡日扶笻行且吟。
露下鶴岡華表舊。　雲歸龜谷樹陰深。
地形磊落英雄略。　兵氣摧殘億萬心。
父老幸能談二古事一。　幾人回レ首又披レ襟。

鎌倉懷二北條氏一　　廣瀬旭莊

聞說覇圖曾此中。　數椽茅屋倚二深叢一。
鶴岡北峙山形合。　龜嶼南開海脉通。
九世家風傳二儉素一。　一門人物半梟雄。
祖孫誅賞如何定。　遜帝罪兼二蹇廚功一。

寶方

かきくもりなどか音せぬ郭公かまくら山に道やまよへる

慈鎮和尚

ながめ行心の色ぞ深からん鎌倉山の春の花園

基綱

あづま路やあまた郡の其中にいかてかまくらさかへろめけん

和田秩父麥はたけとろ成にけり　一鐵

かまくらやひかしの角のかたつむり　其角

屋舗ひとつもたぬ案山子はなかりけり　乙兒

鶴ケ岡八幡宮は停車場を去ること三丁許りに在り國幣中社にして應神天皇、神功皇后、大仲媛の三座を祭る康平六年源頼義由井ケ濱に勸請せしを建久四年源頼朝が茲に遷せしもので石階の下に在る下の宮には仁徳天皇を祀り其拜殿は義經の妾靜が頼朝の命により今樣の舞を奏せしといふ所です正面石階の左側に銀杏の大樹があるが是ぞ承久の昔鶴ケ岡の別當公曉が叔父なる右大臣實朝を刺殺した所です

太宰春臺

鶴岡祠

舊國荊榛亂。靈宮此鬱然。朱門光照地
翠柏氣參天。仙鶴歸華表。孤鴻下塔邊。
誰家宗社守。爲問治承年。

大沼枕山

鶴岡謁八幡祠

靈光千古鬱然存。赫々明威日月新。
一自三諸平伏神戮。兵權長屬姓源人。

左兵衛督基氏

鶴ケ岡木高き松を吹かせの雲井にひゞく萬代のこゑ

鎌倉右大臣

宮はしらふとしきたて〳〵萬代に今ろさかへん鎌倉のさと

爲村

山路より出てやきつる里近き鶴ケ岡べになく郭公

●鎌倉宮　は鶴ケ岡八幡宮の東北凡五六町東鎌倉村二階堂に在り大塔宮護良親王を祀る官幣中社です社殿は金銀を鏤めず丹青を塗らず淸素な社ですから參詣人をして自ら神威の尊きを感せしむ社の後に在る土の牢こそ護良親王が建武年間足利直義の爲に幽閉せられ終に逆臣淵部義博の爲め毒殺に罹りて薨去になつた所で此窟を見れば往事を追懐し何人も悲憤の涙を禁ずることが出來ぬ

●鎌倉五山　とは建長寺○圓覺寺○壽福寺○淨智寺○淨妙寺の五大寺にして其席次は至德三年七月足利義滿の定めたるものです此他賴朝屋敷跡　北條屋敷跡、源賴朝、大江廣元の墓等訪ぬべきもの多けれど寸紙に盡されぬから省くことにした

藤澤驛　上り大船へ二哩六十七鎖　新橋より三十二哩三十一鎖
下り茅ケ崎へ四哩五十三鎖　神戸より三百四十四哩六十二鎖

◉五十三次の第六宿藤澤　戸塚へ二里　日本橋より十三里九町
平塚へ三里十七町　京都より百十四里三十町

驛は相摸國高座郡藤澤大阪町にあり江の島や鵠沼へ行く人は茲にて下車するが便利です

●藤澤町　は驛の東北に在りて東海道第六の宿次に方り人口六千許り町內には旅店や妓樓が多く稻毛屋角若松等は旅店の重なるものです

藤澤望二鎌倉一　林春齋

地從二藤澤一小蹊連○葬蒼望中二里前○
江島鶴岡如在祭○福山鹿阜這般禪○
源家三代將軍府○平氏一流專政年○

若使三陳農遊一此土一。猶來二金澤一問二遺編一。

●遊行寺　は藤澤町大富町の北に在る藤澤山清淨光寺の俗稱です時宗の本山で開山は呑海上人と云ひ正中二年俣野五郎景平の創建したもの寺域は五千五百坪許り寺の後山に在る富士見亭は山海の眺め頗る佳く　今上陛下西國御巡行の御途すがら御輦を駐めさせられた又其東に小栗堂がある馬衙に名を得たる小栗判官滿重の像を安置し寺寶として鬼鹿毛の轡、照手姫所持の古錢なぞ藏してゐる

藤　澤（時行本寺在二于此一）　山崎闇齋

滅二邦人倫一願二往生一。　遊行遊食是橫行。

小儒忽聞擯一眉去。　一地雷同念佛聲。

藤澤遊行寺聞二老僧在一レ院。　中井竹山

散脚道人生坐性。　烏藤鐵錫掛二床頭一。

因知世事多翻案。　閉戸先生今遠遊。

●龍口寺　は相州鎌倉郡片瀬村の内龍の口に在り法華寺にして弘安年間日蓮の弟子日法等の創建せしもの此地は文永八年九月十二日日蓮上人が北條氏の怒に觸れ斬首せられんとせしに法華經の功德にて種々の奇瑞現はれ終に難を免れたといふ舊蹟で世に之を龍の口の御難として日蓮記に有名な所です毎年九月十一十二の兩日法會を行ひ遠近の信徒蜜籠して夜を徹し題目を唱へ太鼓を叩きなか〳〵喧しいとです

首の座は稻妻のせし其時か　木節

虫干や敷革のかはりなつかしき　楊々

鎌の刃をのがれて萩の露白し　仙鳥

鵠ケ沼海水浴　は驛の南二丁餘り鵠ケ沼村の海濱に在り海岸は一帶の沙濱にして江の島を間近に控へ西には富士山を仰ぎ北には大山を望み前は大洋に向つて居るから身心共に爽快を覺ゆる海水旅館は鵠沼館と待潮館とで何れも料理業を兼ねてゐる又此近傍には紳士の別莊が多くある

江の島　は驛より一里十町鎌倉郡の西南端海中の一孤島にして海岸より一條の沙路を通じ潮退くときは徒歩して島に渡れるが此間僅かに五町許り島の周り凡十八町全島皆岩石より成り老樹其間に繁茂し其頂きに湍津姫・市杵島姫・田心姫の三祠あり之を總稱して俗に辨才天と稱へてゐる島内には宏壯なる酒樓旅館いと多く山海の風色明媚にして一の小仙境を成してゐる巖島、竹生島と共に日本三辨天と稱へてあります

渡レ水陟二崔嵬一　雲烟渺壯哉。數峰秋樹合。
萬里暮潮來。境近登仙理。人非二作賦才一。
風塵如可レ脫。何必憶二蓬萊一。

江島　長三洲

天女、島浮青一堆。波間山影合還開。
螺鬟上着白雲片。知是昨宵爲レ雨來。

遊畵島　中井竹山

畵島眞如レ畵。周觀歸去遲。松杉自疎密。
峭嶝互々參差。磐石海仙窟。丹玄天女祠。
龍鱗曾入レ夢。歎息覊功卑。

江の島やちかひ涼しき磯きはに守神なくは波のこもらん

蜃　樓　富士谷成章

わたつみの涙もていまやもふなきの沖の雲間にうかむ海市

むかふ日や萱もすゝきも辨才天　涼　菟

夏の日やさめて宿の稻びかり　嵐　雪

江の島へはたし參りの潮干哉　理　玉

茅ケ崎驛　上り藤澤へ四哩五十三鎖　下り平塚へ三哩二十一鎖　新橋より三十七哩四鎖　神戸より三百四十哩九鎖

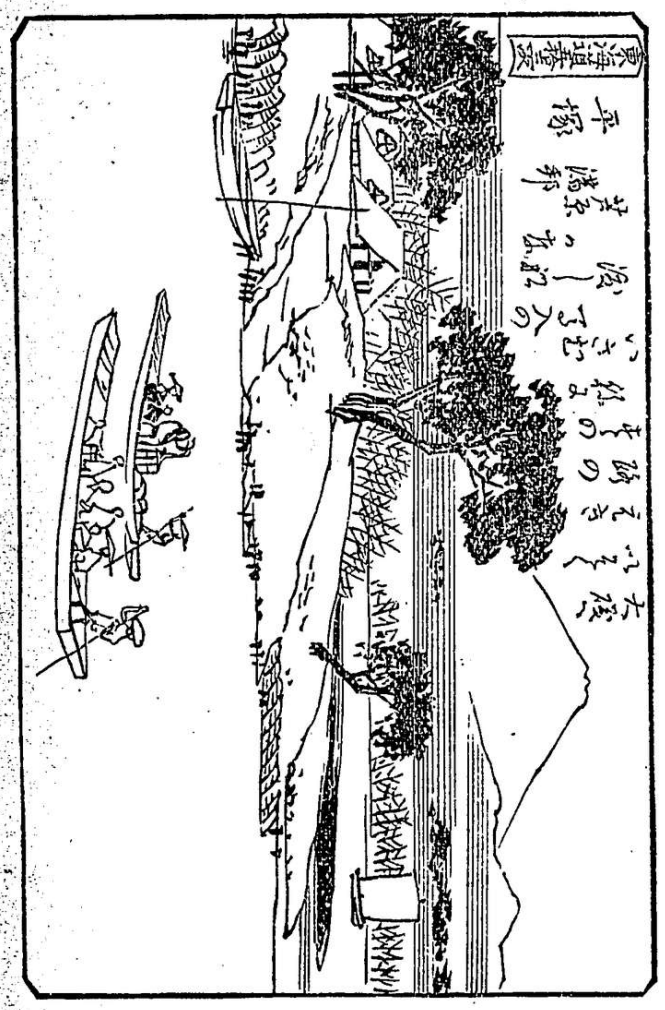
驛は相摸國高座郡茅ケ崎村にあり

平塚驛　上り茅ケ崎へ三哩二十一鎖　下り大磯へ二哩三十七鎖　新橋より四十哩二十五鎖　神戸より三百三十六哩六十八鎖

五十三次の第七宿　平塚　上り藤澤へ三里十七町　下り大磯へ三十町　日本橋より十六里廿六町　京都より百十一里十三町

驛は相摸國中郡平塚町字新宿の南端です

平塚町は東海道第七の宿次にして人口三千六百許り町の西花水川



に架したる花水橋より富士山を望めは頗る好い景色です旅館は翁家、平川館

平塚　山崎闇齋

澄景清風平塚間。浴々漾々一身寛。
逝川不舍盈科進。花水橋邊駐二馬首一。

平塚初春狂詠　七五三魯谷

元朝は旅も一腰さしいはふげにわきざしの平つかの宿

●●大山雨降神社　大山は相州大住郡中第一の高山にして高さ三千八百六十尺山の容は椀を伏せたるやうです平塚町より子易神社まで三里の間は人車を通ずれども是より山麓大山町まで二十丁の間は駕籠に乘るか又は徒歩せねばならぬ路傍には旅舍及び挽物細工を賣る家多く家盡きて八丁許り上れば不動堂があつて茲より石階二筋に分れ十八町にして漸く山頂の本社に達する古へは石尊大權現と稱へ俗に大山不動と云つて佛刹に屬してゐたが明治の後大山祇命を祭り縣社に列せられました神躰は一個の巖石で昔日本武尊東夷征討の節此巖上に憩はせられたといひ傳へてゐる毎年七月の大祭には遠近より參詣するものが澤山ある

●●●馬入川　は一名相摸川といひ甲斐國都留郡山中湖より出で大住郡馬入村なる茅ケ崎驛の西を流れて海に注いでゐる

相摸國俗曰馬入　林春齋

鞍馬肩輿來往舟。相摸河在二相摸州一。
馮夷不レ禀重成志。橋絕人亡水自流。

舟渡二馬乳川一（川爲二甲國境橋下流一國中多二種一菊菊一（馬乳菊菊異名））　中川竹山

聞道峽中多二馬乳一。何時玉液灑成レ川。

安將三雨後初酷色。醉殺舟中僊謫仙。

李白襄陽歌。遥看漢水鴨頭綠。恰似葡萄初醱醅。

寄馬入川歲暮狂詠　　掌川

地道にて行と留らぬ馬入川月毛ひはり毛はやきとしの尾

大磯驛

上り平塚へ二哩三十七鎖　新橋より四十二哩六十二鎖
下り二の宮へ三哩十八鎖　神戸より三百三十四哩三十一鎖
日本橋より十七里二十町
京都より百十里十九町

第五十三次の宿

大磯は相摸國中郡大磯町の北端にあり

大磯町は東海道第八の宿次にして古より磯の郷と稱へ延喜の昔より早く驛路と定つていた人口七千許り海濱は砂清く波穩かで最も海水浴に適してゐるから旅館または紳士豪商の別莊が頗る多い

大磯　　山崎闇齋

精工可レ憐造化權。五色石在二大磯邊一。

地邊時遠女媧氏。世上又誰鍊補レ天。

大磯　　中井竹山

海濱砂礫若二珠璣一。五彩纍々世所レ希。
兒時曾有二人持贈一。豈意如今贋二客衣一。

大磯初春狂詠　　伊藤花卿

饅頭の虎やあれかし初春のおほふくの茶におほいろの宿

大磯狂詠　　爲相

松の木立浪こす岩のけしきまでげに見所は大磯の濱

虎子石は大磯町延臺寺の地内に在り其色蒼黑く高さ二尺許り幅一尺許り石の面に鏃の痕を存してゐる是は曾我兄弟の仇なる工藤祐經が間者を遣して竊に祐成を狙撃せしめしに其箭此石に當りて祐成は恙なきを得たとの言ひ傳へからして十郎身代の石ともいふ

虎子石

林道春

十郎慷慨愛二於兎一一血氣武人犀甲軀。
妾婦當時誓レ屈レ否。隕成此石似二望夫一。

大磯路邊有二虎石一

林春齋

虎娘元是倡家人。同二契貧郎一捨二此身一。
今日堪レ憐遊宴地。唯題二片石一問二遺塵一。

寄虎か石歳暮狂詠

花谷

くれの旅千里も同じ大節季おほいりかしく見る虎が石

虎が石を見て狂詠

十返舍一九

此里の虎は數にも剛のものおもしの石となりし貞節
さり乍ら石に成るとは無分別一ツ蓮の上にや乘られぬ

虎御前今はつめたし石の肌

鬼貫

千鳥なく其夜はさむし虎が許

其角

大磯も虎はむかしに猫の戀

也有

大磯海水浴場

大磯町の海岸に氣清くして砂白く左右に打連なり右には富嶽を仰ぎ左には江の島を招き遠くは房總の山を望み心氣爽快にして其景色恰も繪を見る樣で古より小餘綾の磯と稱し古歌にも數々讀んである

故陸軍軍醫總監松本順氏が明治九年海水浴の人体に効あるを説き此地を以て浴場に充られしこのかた次第に盛大となり今や毎年夏季の浴客五萬に下らず旅館は鴻龍館、松林館、招仙閣等何れも宏壯なる構へことに温浴室の設けもある

小武命婦

いかにしてけふを暮さんこゐるきの急出てもかひなかりけり

前右兵衛督敎定

月日のみたゝ徒にこもるきのいろ〳〵に付てくるゝ年次

小もるきの磯狂詠　藤原光廣

春の日に賤の涙わけこもるきのあまも時をぞわかめかりつゝ

寄小綬磯歳暮狂詠　龜章

としの坂誰か心もこもるきのいろかしさうにみもる足もと

こもるきや雁落つきて足洗ふ　風叟

秋風や小もるきの松に先わたる　嵐蘭

鳴立澤　は大磯町の西端八丁許かりにあり地は一堆の丘狀をなし老松枝葉打繁り風光頗る明媚、此地は西行法師が東路行脚のとき此邊を通りしに折から秋の暮の物淋しきに小鳴が立去りてひとしほ寂寞たる風情を感じければ

心なき身にも哀れは知られけり鳴立つ澤の秋の夕暮

と詠みたる古蹟にして丘上の小堂に西行法師の像を安置し其傍らに大磯の虎の尼像を置きし虎子堂と伊勢の俳士大淀三千風の閑居の跡鳴立庵がある此庵には西行眞筆の色紙其他多くの詩歌ぞも藏めてあるうで客の望みによりては隨分覽せてくれるといふと風流人は扞げても茲には遊ばねばなるまい

彌生の頃鳴立澤により侍りて　飛鳥井雅章

哀さは秋ならねどもしられけり鳴立澤のむかしたづねて

寶永二年秋通りける時　松平左近將監邑乘

今もなをむかしの秋を思ふよ鳴立澤の夕くれの空

寄鳴立澤歳暮狂歌　守由

としの暮に見れば哀もなかりけり鳴たつ澤も心せわしく

西行のすかたを秋のもふへ哉　宗因
夕月や鳴たつさはの影法師　三千風
立と詠し鳴さへたゝす秋の昏　烏明

しきたつさは二上り

もふべのつもやともしびと。ともにかへしてかへらぬは。あはれしぎたつさはの水。くめのいわはしろにもにず。みじかくもよぶ。すぎのつまぞのすきまの風よ。いとのしらべのおかつきに。廿二三をいちどとしっきれてかいなき玉の緒よ。むすびろめけんはぞや物うき。

二ノ宮驛

上り大磯へ三哩十八鎖　下り國府津へ二哩七十四鎖　新橋より四十六哩　神戸より三百二十八哩十九鎖

驛は相摸國中郡吾妻村大字二宮にあり

國府津驛

上り二の宮へ二哩七十四鎖　下り松田へ六哩二十六鎖　新橋より四十八哩七十四鎖　神戸より三百三十一哩十三鎖

驛は相摸國足柄下郡國府津村に在り箱根・熱海に行く人は此所にて下車せねばならぬ小田原町へは一里半湯本へは三里何れも電氣鐵道の便がある、又小田原より熱海へは人車鐵道もありて何れも交通は便利です旅宿は國府津館、蔦屋等が重なるもの

●五十三次の第九宿　小田原　大磯へ四里十七町　日本橋より二十二里一町　京都より百六里二町　箱根へ四里八町

●酒勾川　は元と鞠子川と云ひ源は駿河の富士山麓より出で酒勾村に至り當驛の西を流れて海に入る

酒勾河

林春齋

驛程行盡幾郡縣。酒勾河流水濺々。
柳營信宿建久年。緬懷此邊廻二組綠一。

酒勾河

山崎闇齋

今古山川無レ不レ常。人間只是見二存亡一。

存亡所繫君須識。爲寄酒名一語越王。

寄酒勾川歳暮狂詠　　呉山

月と日のなかれ渡りに一盃しよ酒勾川にる暮るゝとし浪

酒勾川狂詠　　十返舎一九

我々は二人り川越二人りにて酒勾の川にしめてよつたり

小田原町は驛の西南一里半許りにあり東海道第九の宿次ぎに當り大久保氏三千石の舊城下にて山を負ひ海に臨み人口二萬五千許り當國第一の都會です海濱は沈靜に沙清くろも亦海水浴に名あり旅館鰮盟館の隣りには伊藤侯の別莊滄浪閣がある又町の中央に外郎と名くる藥品を鬻ぐ家がある虎屋の透頂香と稱へ昔より名高い家です此藥品は今より凡五百年以前應安年中に元人陳宗敬なるもの歸化して傳へたるもので北條氏綱の時に八棟造りの藥店を許し

て賣り弘めさせたといふとです明治三十五年大海嘯あり人家多く失はる

阻二酒川一宿二小田原一哺時與二諸僚一飲二海濱一

中井竹山

客路朝來被二雨遮一。晩晴共弄海天霞。

巳道前程酒川濶。何辭酩酊臥二平沙一。

小田原初春狂詠　　辻本鳴風

うくひすもけさは小田原うゑらうの口上やはほらうやまつて申

外郎狂詠

三紘のトウチン香の其昔は千里に聞も虎屋外郎

同　　十返舎一九

ういろうを餅かと味くたまされてこは藥じやと苦い顔する

小田原城　は町の北丘上に在り初め北條早雲が城きて之れに居りたが五代氏政となつて豐臣氏に亡ぼされ德川氏の世には大久保忠隣三千石を領して茲に居城し維新の際廢城となつた今は其城跡に二宮尊德を祭れる報德神社と大久保氏の祖先を祀れる大久保神社とがある

小田原原二首　山崎闇齋

有二城郭一有二干戈一　要害關鎭二國家一
孟辯君其可レ記　天時地利人和

小田原城　林春齋

伊勢新郎善用レ兵　火牛計策氣縱橫　上杉三浦大森走　佐竹武田長尾爭　威振二八州一期二勝敗一　運傳二五世一奈二枯榮一　儲胥甲士雖二堅險一　傳陸雄軍孰抗衡　戰似二子顏屠一白帝一功如二王濬樓一烏程一　唯今四海太平日　關左藩屏在二此城一

早雲寺　は湯本村の西南國道より左に入りたる處にあり境内に北條氏五世の墓がある

早雲寺　林春齋

早雲勃起帶二甲冑一　夢中杉鼠託二占繇一
寺門掃レ苔一老僧　猶話昔日五代富

過宗雲寺　中井竹山

八州封殖蔑二三隣一　五世雄威役二百神一
今日空山鐘聲寂　老僧時掃二墓前塵一

石橋山　は小田原町の西南凡一里許り治承年間源賴朝が平家の將大庭景親と戰ひ大敗して古木の朽洞に隱れし時梶原景時之れを覺りしも陽に弓を以て洞内を探り景親を詐きて賴朝を逃れしめし所

です

熱海温泉　は伊豆國の北東海岸にある有名の温泉で此の驛より小田原まで一里半の間は電氣鐵道に乘り小田原より同地まで八里は人車鐵道に乘りて行くのだ地は日金山の東麓にあつて相摸灘に臨み風景絶佳なるが上に夏は涼しく冬は暖かいから都人士の遊びに來るもの絶えず泉質は鹽類泉の透明無臭なるもの少しく鹹味を帶びてゐる此温泉は遠く天平寶字年間に發見せられ其最も奇なるは大湯と云へるものにして此れは晝夜三たび時を違へずに湧き出し其湧き出さんとする初めには疊石の間に蟹の泡を吹く樣にプッ〳〵として滴り遂に沸騰する時となれば宛かも數臺の大喞筒を以て瀉ぎ出すやうに蒸汽と共に熱湯迸しり出でゝ其響恰も雷鳴の如く一時間にして止むとは奇である

浪折〳〵雲としらむや浦の夏

しら濵や湯と知なから音すゝし　　作者不知　　吐月

湯本温泉　は驛より三里電汽鐵道にて行かれる場所は足柄下郡湯本村早川の南岸東海國道に當つてゐる此の地より西は道漸く嶮しくて箱根峠に至るまでの里程は二里廿八丁温泉は湯坂山の麓なる岩の間より湧き出づる無色透明の單純泉にして温度は攝氏の四十四度五分を保ち之を金泉湯と云て旅宿には紳士貴婦人の投宿に適する福住樓を第一とし其他壯麗なる建物多く盛夏の候となれば來り浴するものがなか〳〵澤山ある

湯本より爪先上りに鳥の音を聞き山水を賞しつゝ歩を進めますれば塔の澤。宮の下。木賀。蘆の湯。堂ケ島。底倉等の温泉にて以上併せて之を箱根七湯と稱してゐる

早川　阿佛

あつま路の湯坂をこゆて見わたせはしは木流るゝ早川の水

箱根湯狂詠

鬼のない地獄からわく箱根の湯やまゐなをれば極楽となる

手ぬくひは何山姫の湯にろめん　沾徳

をのれさへ餓鬼に似たるよさりくす　嵐雪

松田驛

上り國府津へ六哩二十六鎖　新橋より五十五哩二十鎖
下り山北へ三哩四十五鎖　神戸より三百二十一哩七十三鎖

驛は相摸國足柄上郡松田村大字松田總領にあり當驛より線路急勾配となり四十分一に達す

大山雨降神社　は驛より三里餘なれども頗る難路同社の記事は平塚驛の部に述べてある

山北驛

上り松田へ三哩四十五鎖　新橋より五十八哩六十五鎖
下り小山へ五哩四十二鎖　神戸より三百十八哩二十八鎖

五十三次の第十宿　**箱根驛**　小田原へ四里八町　日本橋より二十六里九町
三島へ三里二十町　京都より百一里三十町

驛は相摸國足柄上郡川村大字山北に在り

箱根町　は箱根山の頂に在り東海道第十の宿次にして人口八百許り

山上の遠望は至極廣大にして霧深く時き〳〵其の風色を妨げる此所の名物は挽物細工で驛の東端に箱根の關の趾がある

蘆の湖　は箱根山の頂にあつて周回五里許り其水は流れて早川となり小田原の西に注ぐ

箱根山　林道春

滿目山河覇氣帶。尚餘天險設二金湯一。
雍熙二百年寰宇。無三後人知二古戰場一。